

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 2 年 5 月 20 日現在

機関番号：32663

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K04333

研究課題名(和文) 潜在測定による恨み忌避感が制御焦点と社会的行動に及ぼす影響についての実験的研究

研究課題名(英文) Studies of influences of 'Fear of Resentment' on regulatory focus and social behaviors.

研究代表者

北村 英哉 (Kitamura, Hideya)

東洋大学・社会学部・教授

研究者番号：70234284

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本計画は「人から恨まれたくない気持ち」が日本人における自己主張回避及び協調傾向をいかに説明するか、他の要因である関係流動性、制御焦点の個人差と併せて検討することであった。恨み忌避感尺度及び相関する清浄志向尺度を作成し、信頼性・妥当性を検証し、「心理学研究」に掲載及び海外誌審査中である。防止焦点の高い者は、恨みへの不安感を通して自己主張を抑制する媒介効果を確認した。恨み忌避感拒否回避、調和性、空気を悪くしたくないという気持ちに影響し、国際比較を行い日本に顕著な傾向と確認できた。恨み忌避感表情の怒りの読み取りを促進することが実験で示され、多くの事象を説明する有用なモデルを確認することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本人の自己主張回避傾向や協調性につき、関係流動性によって十分に説明できない点を本研究では、日本人の集団的特性でもある恨み忌避感(他者からの恨みを怖れる気持ち)と清浄志向/穢れ忌避(POPA)尺度の全く新しい2つの概念を提起し、かつ実証的に測定する尺度を新たに構成することで、その有効性を検証した。「心理学研究」に掲載されたことから新たな試みが異議のあるものとの社会的承認も得、国際比較データも得て確認した。

穢れ忌避のひとつ感染忌避の検討は時代的要請にも合致する社会的意義があり、場の空気を重んじる日本的傾向との関係も見られ、潜在測定を用いた検討など方法的にも新たな学術的意義を示した。

研究成果の概要(英文)：Twelve studies were done to explain that Japanese avoid assertion and show cooperative tendency, using 'Avoidance of Resentment Scale(ARS)' and 'Purity Orientation/Pollution Avoidance(POPA)' scale. The papers confirming reliability and validity of the scales including testing with implicit measures were submitted and accepted or under review. A mediation effect of Anxiety of Resentment on the relation between prevention focus and avoidance of assertion was confirmed. The results of international study showed these relations and tendencies were observed more clearly in Japan than in US. The effects of ARS were clearer than relational mobility. ARS was correlated significantly with avoidance of rejection, cooperation, harmony, and tendency of desire for good relationships with others. Also ARS facilitated implicitly a detection of anger from expression of others. The importance and the utility of the model were affirmed.

研究分野：社会心理学

キーワード：恨み忌避感 主張性 関係流動性 清浄志向 感染忌避 宗教心 協調性 空気信仰

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

グローバル社会への適応において、一段と国際化が求められている日本において、教育現場でもしばしば確認される日本人の主張の弱さや自分の意見を述べるのが苦手な点を克服するためには、その由来・原因を科学的に知ることが求められる。文化比較の心理学において、これまで関係流動性、「安心」社会 v s 「信頼」社会など有効なモデルや概念が呈示されている。しかし分析を行うと有効であるものの説明しきれない分散も多くの残り、さらなる理論的な提案が待たれる。そのなかで本計画は、日本文化に焦点をあてて、「恨み」をキーワードに、日本人の特徴をより子細に検討するため、広く他分野の文献や成果にもあたって捉えなおし、実証的に検証しようという試みであった。

### 2. 研究の目的

本計画は「人から恨まれたくない気持ち」=「恨み忌避感」が日本人における自己主張回避及び協調傾向をいかに説明するか、他の要因である関係流動性、制御焦点の個人差と併せて検討することであった。過度に人から恨まれることを怖れるゆえに、大学の授業のゼミ発表でも発表者の発表内容に含まれる非個人的な研究事象に対しても「指摘」「批判」することがはばかられ、大人においても企業内で役職者の提案に自由に反対がしにくかったりする。日本人の沈黙は美德のような考え方は国際的には通用しないにも関わらず、主張性が弱い一因として「他者から恨まれたくない気持ち」が強すぎることを文化比較データで証明し、主張性の他、協調性、協調行動などにおいて、「恨み忌避感」が影響を及ぼしていることを確認することが主要な目的である。

さらに、恨み忌避感にかかわって、空気を乱すことへの恐れ、またそうした空気信仰の背景に「ケガレをなすことを怖れる気持ち」=「ケガレ忌避傾向」を取り上げ、併せて、主張性などの日本人の行動への影響を副次的に検討する。

### 3. 研究の方法

最終的に 12 個の研究を行った。実験研究を 2 つ、調査研究を 10 行った。

実験研究では、それぞれ、恨み忌避感尺度 (ARS とする) および清浄志向 / 穢れ忌避 (以降 POPA) 尺度の 2 つの尺度おのおのについての予測的妥当性検証で、恨み忌避感では ARS 得点の高い者が、他者のあいまいな表情から怒りなどのネガティブな兆候を読みやすいことを確認した。POPA では、穢れを表す墓石などの画像刺激に対してケガレ忌避感が高い者たちが選択的にネガティブ感情を生じさせるかの AMP 技法を用いた検証である。PC のディスプレイを用いて画像を提示し反応を取得した。前者は実験室における個人実験、後者は PC 室における集団実験として行った。

調査では、まず各々の尺度構成を行い、信頼性・妥当性の検証を行った。恨み忌避感(調査 1、2、3)、穢れ忌避傾向(調査 4、5)について、関連する心理学概念との相関をとること、再テスト信頼性を得ること、さらに、因子的な検討を行った。

恨み忌避感について、400 名、250 名ほどのデータを 3 度にわたって得て検討を行った。穢れ忌避について、400 名、200 名ほどのデータを 2 度得て検討を行った。さらに、両尺度の関係を検討する 160 名程度のデータをと(調査 6、7)、年代性別の効果を体系的に検討するために 576 名のデータを調査会社を通じてとり(調査 8)、国際比較のために恨み忌避と主張性の関係に焦点をあててアメリカのデータを 400 名とり(研究 9)、それと対照する日本のデータを 100 名とった(調査 10)。

このなかで、協力志向、調和性、不信感、拒否不安、拒否回避、関係流動性、制御焦点、主張性、空気信仰、アニミズム傾向、不思議現象態度、公正世界観、道徳基盤、嫌悪尺度との関係を検討した。

調査方法としては主として Web 調査を行い、大学生および一般の人々、国内外からデータを得た。

利益相反はなく、研究計画はすべて東洋大学大学院社会学研究科の倫理委員会の審査を経て承認された。

### 4. 研究成果

平成 29 年度には、恨み忌避感尺度を作成し、実験によって PC で呈示される他者の表情において怒りを敏感に、喜びを控えめに認識する傾向と正相関することが示された。平成 30 年度には、調和性、拒否不安傾向、拒否回避欲求、防止焦点と恨み忌避感が正相関することが示され、当初計画の中心的仮説の中核部分の検証を得て、この成果は 2020 年 4 月発刊の心理学研究第 91 巻 1 号「恨み忌避感尺度の作成と信頼性・妥当性の検討」として公刊された。

その中で恨み忌避感尺度は、恨み不安、恨み被害忌避、言動抑制の3因子からなることが示された。主な相関関係を以下の表に示す。

表1 恨み忌避感3因子と、調和性、信頼性、不信感との相関関係

	恨み被害 忌避	言動 抑制	協調 解決	調和 志向	非協調	協力 志向	他者 信頼	不信
恨み不安	.475**	.532**	-.115*	.378**	-.124*	.195**	-.150**	.180**
恨み被害忌避		.406**	.162**	.480**	-.110*	.105*	-.044	.197**
言動抑制			.050	.565**	-.071	.246**	-.049	.147*
協調解決				.284**	-.484**	.457**	.367**	-.187**
調和志向					-.213**	.388**	.054	.153**
非協調						-.493**	-.286**	.302**
協力志向							.387**	-.271**
他者信頼								-.573**

\*  $p < .05$

\*\*  $p < .01$

平成30年度末にはPOPA尺度を構成し、信頼性・妥当性を検証した。成果である論文は、現在海外誌に投稿、審査中である。POPA傾向は嫌悪尺度と正相関するものの、嫌悪感情とは異なり、独自の傾向を測定していること、アニミズム傾向と正相関の関連があること、不思議現象に対する肯定的態度、嗜好性と関連しつつも、不思議現象を怖れる恐怖感情とも正相関することが示され、構成概念としての妥当性が示された(一部の相関を表2に示した)。POPAは、精神清浄、信心尊重、身体清浄、感染忌避の4因子をもつことが示された。

表2 清浄志向/穢れ忌避(POPA)傾向と、嫌悪感、アニミズムとの関係

	信心 尊重	身体 清浄	感染 忌避	死嫌 悪	腐敗 病気	不潔 嫌悪	自然 崇拜	分身 化
精神清浄	.537**	.469**	.210**	.255**	.221**	.352**	.622**	.439**
穢れ忌避 尺度	信心尊重	.458**	.158**	.458**	.370**	.413**	.463**	.523**
	身体清浄		.194**	.361**	.328**	.438**	.256**	.217**
	感染忌避			.217**	.201**	.387**	0.091	0.052
嫌悪尺度	死嫌悪				.463**	.519**	0.092	.114*
	腐敗病気					.483**	.127*	.189**
	不潔嫌悪						.189**	.182**
アニミズ ム尺度	自然崇拜							.498**

\* :  $p < .05$  , \*\* :  $p < .01$

さらに恨み忌避感と相関する穢れ忌避傾向や空気を悪くすることを避けようとする空気信仰と正相関することを確かめた。年度末には穢れ忌避傾向尺度の公正と妥当性検証を行った。

平成 31 年度には、主張性との関係を検討し、防止焦点的志向性が恨み不安を媒介して自己主張を控えることを示した（図 1）。制御焦点の直接効果はなく、恨み忌避感を説明モデルに加えることの有効性が確かめられた。また、POPA と恨み忌避感との間の相関関係も確認された。

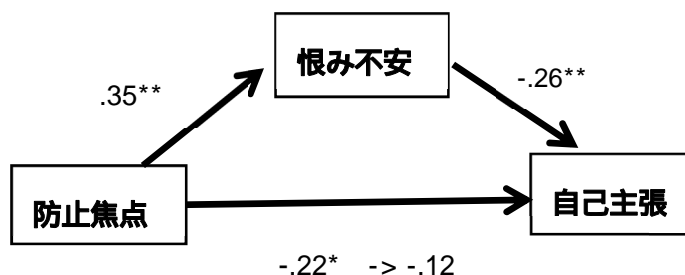


図 1 恨み不安の媒介効果

平成 31 年度 12 月～翌 1 月にかけて、POPA の年代別検討を行った後、恨み忌避感を中心に国際比較調査を行った。表 3 に示したように、平均値を検討すると、すべて日本の方がアメリカよりも高かった。日本における文化傾向である一端が示された。これらの結果は、令和 2 年度の日本心理学会、日本社会心理学会、令和 3 年度に延期された国際学会 ICP において発表予定である。

表 3 恨み忌避感と自然観の日米比較

	日本			アメリカ		
	<i>n</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>n</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>
自然崇拜	106	4.16	1.46	433	3.15	2.14
恨み不安	106	4.45	1.19	432	3.37	1.46
恨み被害忌避	106	5.00	1.47	432	4.35	1.53
言動抑制	106	4.45	1.24	432	4.17	1.53

年代の効果としては、おおむね POPA も恨み忌避感も年代によって上昇する傾向があり、世代的にいくぶん伝統的価値観と考えられることも確かめられた。そのほかに、空気に配慮する傾向は特に恨み忌避感と関連が強く、年代によってはそうした空気信仰と POPA の関連も認められた。これまでほとんど取り上げられなかった日本における伝統的価値観と、現代における若者を含んだ主張性の弱さが関連を持っていることは新たな発見であり、日本の文化を再発見する研究ともなる。主張性や協調性と関連して、恨み忌避感、清浄志向といった新たな概念を分析に用いていく有効性が示され、今後さらに多様な価値観との関連性を、国際比較を行いながら検討を進めていくことが求められよう。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 北村英哉・下田麻衣	4. 巻 91
2. 論文標題 恨み忌避感尺度の作成と信頼性・妥当性の検討 拒否不安, 調和性, 信頼感との関連	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 心理学研究	6. 最初と最後の頁 1-9
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) <a href="https://doi.org/10.4992/jjpsy.91.19204">https://doi.org/10.4992/jjpsy.91.19204</a>	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 北村英哉	4. 巻 56
2. 論文標題 責任帰属に及ぼす道徳基盤と公正世界信念の影響	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 東洋大学社会学部紀要	6. 最初と最後の頁 39-48
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 北村英哉・山口雄人・石橋加帆・Michael J. Gill	4. 巻 16
2. 論文標題 加害者の生い立ち情報がBlameおよび帰属と自由意志の推定に及ぼす影響	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 東洋大学21世紀ヒューマン・インタラクション・リサーチ・センター研究年報	6. 最初と最後の頁 43-47
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 該当する
1. 著者名 小林麻衣・堀毛一也・北村英哉	4. 巻 88
2. 論文標題 学業場面における誘惑対処方略の有効性の検討	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 心理学研究	6. 最初と最後の頁 525-534
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) <a href="https://doi.org/10.4992/jjpsy.88.16005">https://doi.org/10.4992/jjpsy.88.16005</a>	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 北村英哉	4. 巻 9
2. 論文標題 感情と多面的思考, 認知欲求が動画広告の説得効果に及ぼす影響 : TV ショッピングの速い/遅い動画を用いて	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 関西大学心理学研究	6. 最初と最後の頁 21-34
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐藤栄晃・北村英哉	4. 巻 17
2. 論文標題 恨み研究序論 : 概念と形成過程	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 関西大学心理学叢誌	6. 最初と最後の頁 35-40
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計15件 (うち招待講演 1件 / うち国際学会 3件)

1. 発表者名 北村英哉・松尾朗子
2. 発表標題 清浄志向 / ケガレ忌避傾向尺度の作成と信頼性・妥当性の検討
3. 学会等名 日本感情心理学会第27回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 北村英哉・松尾朗子
2. 発表標題 清浄志向 / ケガレ忌避傾向とケガレ関連刺激への潜在態度との関連 - AMPを用いた検討 -
3. 学会等名 日本社会心理学会第60回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 北村英哉・山口雄人・石橋加帆・Michael J. Gill
2. 発表標題 生い立ち情報がハラスメント非難の緩和に与える影響の検討
3. 学会等名 日本心理学会第83回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 北村英哉
2. 発表標題 文化部・運動部イメージと部活経験、活動目標との関連 - 部活 I A T によるステレオタイプの検討 -
3. 学会等名 日本パーソナリティ心理学会第28回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 北村英哉・尾見康博
2. 発表標題 自己卑下および他者賞賛における相互性の期待
3. 学会等名 日本グループ・ダイナミクス学会第66回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Hideya Kitamura
2. 発表標題 Effects of moral foundation priming on the evaluation and interpretation of human behavior
3. 学会等名 International Convention of Psychological Science (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 北村英哉・小林麻衣・木村はるか
2. 発表標題 恨まれる状況の喚起と恨み忌避傾向が他者の表情検出に及ぼす効果
3. 学会等名 日本社会心理学会第59回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 佐藤栄晃・北村英哉
2. 発表標題 他者からの恨み感受性尺度作成の試み
3. 学会等名 日本社会心理学会第59回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 澤田匡人・石井辰典・村山 綾・綿村英一郎・遠藤利彦・北村英哉
2. 発表標題 正義は人の為ならず 公正推論から描く「シャーデンフロイデ」の輪郭
3. 学会等名 日本心理学会第82回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 北村英哉・小林麻衣
2. 発表標題 恨み忌避感尺度の作成と妥当性の検証
3. 学会等名 日本感情心理学会第26回大会
4. 発表年 2018年



1. 発表者名 北村英哉
2. 発表標題 偏見と差別の仕組み
3. 学会等名 第13回日本感情心理学会セミナー（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Hideya Kitamura
2. 発表標題 Effects of priming of moral foundations on judgment for moral conflict task
3. 学会等名 The 19th Annual Meeting of the Society for Personality and Social Psychology (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Oda, Y., Tani, J., & Kitamura, H.
2. 発表標題 Psychologists' and clinicians' view of psychology.
3. 学会等名 The 17th Conference of International Society for Theoretical Psychology (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 小田友里恵・谷井淳一・北村英哉
2. 発表標題 心理学観を問う：TOS, IODを用いた心理学者および臨床家における検討
3. 学会等名 日本心理学会第81回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 佐藤栄晃・北村英哉
2. 発表標題 一対比較を用いた不幸・不運の出来事分析
3. 学会等名 日本心理学会第81回大会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 子安増生・丹野義彦・箱田裕司監修 北村英哉他多数	4. 発行年 2020年
2. 出版社 有斐閣	5. 総ページ数 1000
3. 書名 現代心理学辞典	

1. 著者名 内山伊知郎監修、北村英哉他25名	4. 発行年 2019年
2. 出版社 北大路書房	5. 総ページ数 472
3. 書名 感情心理学ハンドブック	

1. 著者名 北村英哉・唐沢 穰	4. 発行年 2018年
2. 出版社 ちとせプレス	5. 総ページ数 290
3. 書名 偏見や差別はなぜ起こる？：心理メカニズムの解明と現象の分析	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

## 6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	下田 麻衣  (Shimoda Mai)	立正大学・心理学部・助教  (32687)	
研究協力者	松尾 朗子  (Matsuo Akiko)	東海学園大学・心理学部・助教  (33929)	
研究協力者	佐藤 栄晃  (Sato Hideaki)	関西大学・大学院心理学研究科・博士後期課程  (34416)	